夜の王様　～タイムリミットは三日間～

名瀬市立小宿小学校　四年　新田　紗紀

やぁ、ぼくセシル。読書が好きな小学四年生さ。えっ、男の子が本を読むなんておかしい、だって？とんでもない。ぼくはね、読書好きなおかげで、君の知らない国へ行ったことがあるからね。この事は、誰にも言った事がないんだけど、君にだけこっそり、教えてあげるよ。その日、ぼくはね・・・・

「何かご注文は、ありますか。」

「うーん、いいよ。」

やっぱ、教室よりきっ茶店の方がいいや。静かだし、涼しいし。本を読むにはすごくいい所だよな。みんな、ぼくが本を読んでいると、すぐばかにするんだから。男が本好きで何が悪い！スポーツがきらいで、何が悪い！

「キーン、コーン、カーン、コーン。」

「あっ、やばい、昼休みが終わっちゃう！急いで帰らなきゃ！」

おっと、お次はぼくのきらいな体育だ。どうしよう。まっ、これから教室に行っても、間にあわないからな。よし、さぼっちゃおう！ぼくが、かくれる場所といったら？・・・。図書室しかない！ぼくは、そーっと、図書室をのぞいた。よかった。誰もいない。

「がらがらがら、ぴっしゃん。」

うふふ。誰もいない図書室も、けっこういいな。

「さーて、授業が終わるまで、本でも読もう。」

ぼくが好む本は、たなのおくにある、うすぎたない本だ。そういう、古い本の方が、おもしろい事が多いからね。変かもしれないけど、君の学校の図書室でも、試してみたらどう？ぼくはいつものように、たなのおくに目を付けた。よいしょっと。手探りでひっぱりだしたのは、

「ん？なんだ、これ？」

題名が書いてない。作者の名前も、何も書いていない。黄色の表紙で、なんだかすいこまれるみたい。とてもきれいな色だけど、なんだかちょっぴり、さびしそう。ぼくは、表紙を開いてみた。

「ん？」

またまた、不思議だぞ？ページをめくっても、まっしろけ。変な本。

「まぁ、いいか、家に持って帰ろう。」

「キーン、コーン、カーン、コーン。」

「体育が終わったぞ。」

そーっと、体育館をのぞいてみる。あっ、みんな帰っていったぞ。ぼくは、一足先に、教室に帰らせてもらうよ。大急ぎで教室にもどるぼくは、気づかなかった。かかえている本が、あの冒険につながるとは。

　その日の夜、ぼくはなかなかねつけなかった。なんだか、あの本が気になってしかたがなかったからだ。ぼくは、机の上の本を手に取った。きれいな色。図書室で見た時よりも、かがやいて見える。ページをめくってみた。
「あれ？どうして？」
絵がかいてある。図書室にいる時、見落としたのかな。次々出てくる見事な絵。
「ん？」
つなげてみると、何かのマンガに見えなくもないぞ。ぱらぱらマンガかな。絵を一ページずつ見ていると、だんだん分かってきた。星に乗った王様が、部屋で寝ている男の子をよんでいる。まどの外から。男の子はそれに気づいて、まどを開ける。すると、いきなりつれていかれちゃうんだ。
「へーっ、うまくできてるもんだな。」
ぼくはベットのそばに本を置いて、いつの間にかねむってしまった。
「コンコンコン。ドンドンドン。」
「セシル！セシル！」
「なんだ？」
声のする方を見てみると、変な格好の男の子が立っている。頭にかんむりをつけて、王様みたいだ。ぼくは、まどを開けた。そして、ギョッとした。なんと、その男は、星に乗って、ういているんだ。
「お、お前はだれだ！」
「話は後でしましょう。ささっ、早く乗って。」
その変な男は、いきなりぼくのうでをつかむと、そのまま飛んでいったんだ。
　家が見えないほど小さくなった時、その男は、ふわふわした地面の上に、ぼくをおろした。ぼくは、何が何だか分からなくて、わめきちらしていたんだ。すると、男が、ぼくに言った。
「びっくりさせて、すみません。実は、あなたに頼みたいことがあるんです。」
「えっ？」
「まぁ、聞いてください。私は星の国の王です。それで・・・」
「あー、ちょっと待って。あなたの言っている事は全然分からない。」
「あっ、そうか。すみません。最初からしっかり説明します。ここは、夜の世界です。夜の世界には、二つの国があります。『星の国』と『月の国』です。私は星の国の王です。月の国とは、昔から仲が悪く、ケンカばかりしていたのです。
ある日、月の国のへいたい達が、王の命令で、星の国の星達をさらってしまったのです。そして、星達を王のけらいに・・・」
星の国の王は、なみだぐんでいた。

「そうか。で、ぼくは何をしたらいいの？」
「おぉ、助けてくださるのですか。月の国にさらわれていった星達を助けてほしいのです。」
「なぜ、ぼくが？」
「おぉ、よくぞ聞いてくださいました。私はどうすれば助けてくださるお人をさがせるのか、よーく考えたあげく、ある図書室にかくれました。たなの奥に。こんな所に目をつける人、その人は、好き心にあふれた、ゆうかんなお人じゃないかと思い、本にかくれ、待っていたのです。すると、あなたが、私を見つけてくださいました。」
「なんだか変な考えだけど、ぼくはほめられているみたいだし、まぁ、いいか。助けてあげる。で、どうすればいいの？」
「はい、月の王は、まん月になる前に、一度出かけます。地球では、新月とかなんとか言うようで・・・」
「うん、うん、それで？」
「月の王は、三日たつと、出かけから帰ってきます。地球では・・」
「うん、三日月って呼ばれている。」
「はい、三日月です。その三日の間に、星達を助けてほしい。助け方は、かんたんです。星達は、月の王が、出かけている三日間、にげぬよう、おりにとじこめられています。そのおりのかぎを開けて、星をにがしてくだされば、いいのです。」
「かぎとかないの？」
「あることは、あるんですが・・・。このかぎが、おりのかぎかどうかわかりません。」
「どういうかぎなの？」
「これです。」
「えっ？」
「どうかなさったのですか？」
「それ、本だよ。しかも、ぼくが図書室から借りてきた本じゃないか。」
「あぁ、でもこれは、ちゃんとしたかぎですよ。これを、おりにぶら下がっている板に押しつけてもらえば、すぐにおりのとびらは開きます。」
「そう。でもそんなかんたんな事、三日の間にすぐできるじゃないか。」
「星達がこの夜の世界ににげるには、ずいぶん時間がかかるんですよ。なんてったって、広いですからね。」
「そうか・・・。分かった。」
「では、これから王は出かけます。この本を持って、南に行ってください。」
「うん。必ず星達を助けるからね。」
「お気を付けて。」
ぼくは、ふわふわした地面を、南に、南にとずんずん進んで行った。

「もしかして、ぼくは、雲の上を歩いているのかな。」
なんて、のんきな事を言いながら、歩いていると、遠くにとりかごみたいなものがある。それより、けっこう大きい。
「なんだろう？も、もしかして？」
ぼくは、大急ぎでその鳥かごに向かって走って行った。
「やっぱり！星達だ。」
ぼくが、おりの前に行くと、星達は、とてもびっくりしていた。ぴかぴか光って、ピーピー鳴いている。
「大丈夫。ぼくは、君達を助けにきたんだよ。これからすぐに、とびらを開けるからね。」
星達は、しばらくどよどよしていたが、代表のような星が、おりの中から、ぼくをじっと見て、にこっと笑った。すると、周りにいた星達も、にこにこ笑って、ぴかぴか光った。
「さっ、かぎを開けるね。」
ぼくは、さっきの本を星達に見せた。星達は、その本をまじまじと見つめ、こくっとうなずいた。なんだろう？と思っていると、星は、ぼくに手招きしているようだ。ま、星達は手がないから、ずいぶんへんてこな手招きになったけどね。ぼくが、星達が手招きしている所へ行ってみると、そこには、糸でつり下げられた古い板があった。
「これだ！」
ぼくは、一つ深呼吸すると、本をしっかりにぎりしめ、板の所にゆっくり押しつけた。
「びかっ。」
強い光が、板と本の間から出てきたと思うと、しゅんと急に消えてしまった。その時だった。一つの星が、
「ピピーピーピッピッピー。」
と、大声で鳴き始めた。その星のほうを見ると、星が何かを教えている。
「ギギーギギギー。」
にぶい鉄の音が聞こえた。そして、おりのとびらが、開いたんだ。おりの中にいる星達は、大さわぎだ。みんないっせいに、おりの外へ出て、わになっておどりだした。
「早く、みんなにげて！遠くにげるんだよ。気を付けてね。月の王なんかに、つかまっちゃだめだよ！」
ぼくが言うと、星達は、みな、おもいおもいに、どこかへとびさっていった。

「はっ！」
ぼくが、気づくと、ベットの上だった。時計を見ると、夜中の一時だ。
「夢だったのかなぁ・・・・」
ぼくは机の上の本をとった。何気なく開いてみると、
「あぁっ！」
なんと、そこには、こう書かれていたんだ。
『あなたこそ、夜の王！星達は自由だ！』

ぼくはうれしくて、うれしくって、それからねむれなかったよ。これでも夢だと思う？

次の日からぼくは、どうどうと教室で本を読むようになったよ。あぁ、それから、あの本は、机の引出に大事にしまってある。君、夜、星達を見てごらん？どれもみんなバラバラに、自由にかがやいているだろう？それは、全部ぼくの手がらさ！

えっへん！

「キーン、コーン、カーン、コーン。」
おっといけない！昼休みが終わっちゃう！次は体育だよな。図書室にかくれよっと！君もいっしょにおいでよ！もしかしたら、また、おもしろい冒険に、出会えるかもしれないよ。